

外国語学部 2023 年度前期セメスター留学実施報告

外国語学部セメスター留学制度の一環で、本学部生を下記の協定校に派遣したことを報告する。

<セメスター留学先（協定校のみ）一覧>

派遣国	大学名	派遣期間	派遣者数
オーストラリア	Deakin University	2023.4.17～2023.8.14	2 名
カナダ	University of Calgary	2023.4.22～2023.7.23	4 名

本留学プログラムの実施目的は、下記 2 点である。

- (1) 各国留学生らとともに、英語の 4 技能に加え、語彙、文法、発音等を学び、実践的な英語運用能力を向上させる。
- (2) 留学を通じて、グローバル社会で求められる応用力・コミュニケーション力と、外から日本を見ることによって深まる自文化への理解力とその発信力、留学先国・地域やそこに集う各国留学生の母国事情・文化への理解力を、実体験を通じて向上させる。

上述の目的に沿って、派遣学生は各国の留学生らとともに、各大学が実施する English Program に参加し 4 技能の向上に努め、加えてクラス内外での主体的な学生間交流の中で、他国文化への理解に努めつつ、自分自身の母国の歴史、文化、社会を世界に発信し、相互に理解し協調しあうことの重要性を学んだ。

当初は、授業スタイルや各国留学生の特有のアクセント、英語を駆使して自らの考えの説明や建設的な議論を行うことの難しさ等に戸惑いながらも、積極的なコミュニケーションに努め、英語力の向上等に励んだ。

また、限られた留学期間で最大限の効用を得るために、授業外の各種アクティビティや大学のボランティア活動に積極的に参加し、クラスメイト以外の現地学生や新入生らとの主体的な学生交流を通じて、英語力の更なる向上に努めた学生もいた。

日常生活では、文化的背景が異なるホストファミリーやローカルコミュニティーとの交流を通じて多様な価値観に触れることができ、これは自身のキャリア形成に資する視野の拡大にもつながった。

今回の留学は、帰国後の専門的な学びへの動機づけと各学生のキャリア形成への重要な機会となった。

外国語学部 2023 年度後期セメスター留学実施報告

外国語学部セメスター留学制度の一環で、本学部生を下記の協定校に派遣したことを報告する。

<セメスター留学先（協定校のみ）一覧>

派遣国	大学名	派遣期間	派遣者数
カナダ	Block University	2023.9.9～2023.12.12	6 名
カナダ	University of Calgary	2023.9.16～2023.12.19	6 名
アメリカ	Murray University	2023.8.13～2023.12.12	2 名
アメリカ	Utah Tech University	2023.8.14～2023.12.17	2 名
オーストラリア	Deakin University	2023.8.8～2023.12.10	4 名
オーストラリア	Queensland University of Technology	2023.8.23～2023.12.25	3 名

本留学プログラムの実施目的は、下記 2 点である。

- (1) 各国留学生らとともに、英語の 4 技能に加え、語彙、文法、発音等を学び、実践的な英語運用能力を向上させる。
- (2) 留学を通じて、グローバル社会で求められる応用力・コミュニケーション力と、外から日本を見ることによって深まる自文化への理解力とその発信力、留学先国・地域やそこに集う各国留学生の母国事情・文化への理解力を、実体験を通じて向上させる。

上述の目的に沿って、派遣学生は各国の留学生らとともに、各大学が実施する English Program に参加し 4 技能の向上に努め、加えてクラス内外での主体的な学生間交流の中で、他国文化への理解に努めつつ、自分自身の母国の歴史、文化、社会を世界に発信し、相互に理解し協調しあうことの重要性を学んだ。

当初は、授業スタイルや各国留学生の特有のアクセント、英語を駆使して自らの考えの説明や建設的な議論を行うことの難しさ等に戸惑いながらも、積極的なコミュニケーションに努め、英語力の向上等に励んだ。

また、限られた留学期間で最大限の効用を得るために、授業外の各種アクティビティや大学のボランティア活動に積極的に参加し、クラスメイト以外の現地学生や新入生らとの主体的な学生交流を通じて、英語力の更なる向上に努めた学生もいた。

日常生活では、文化的背景が異なるホストファミリーやローカルコミュニティーとの交流を通じて多様な価値観に触れることができ、これは自身のキャリア形成に資する視野の拡大にもつながった。

今回の留学は、帰国後の専門的な学びへの動機づけと各学生のキャリア形成への重要な機会となった。

以上

韓国フィールドワークで現地訪問機関などでも活動様子

1. 東亜大学との交流会（2023年9月4日 10:00~14:00）

本学との協定校である東亜大学は、9月4日10時に訪問し、1時間ほどキャンパスツアーの後、11時から13時半まで、昼食をはさんだ交流セミナーを行った。本学からは、「日本の食文化の歴史・現在と未来」、そして「日本の若者文化と若者言葉」について30分ずつ報告し、報告終了後には参加した約30名の東亜大学の学生たちと活発な討論が行われた。

（写真1）東亜大学の学生たちとの交流セミナーの様子



（写真2）東亜大学の学生たちとの交流セミナーの後、大学博物館前で集合写真



2. 釜山港湾会社訪問(2023年9月5日 10:00~12:00)

釜山港は韓国最大の港湾であり、アジア太平洋地域でも重要な物流拠点の一つである。その地理的位置と深い水深により、国際貿易の要所としての役割を果たしている。釜山港湾会社は、釜山港を運営および開発するために設立された。釜山港湾会社の広報館で、担当職員から釜山港の歴史、経済的な役割、観光名所としての魅力などを説明してもらった。

(写真3) 釜山港湾会社の広報館で、担当職員から釜山港の歴史、経済的な役割に関する説明してもらっている様子。



3. 慶尚大学での交流セミナー (9月5日 15:00~20:30)

滞在3日目、晋州の慶尚大学で、慶尚大学の日本語教育学科の学生たちと交流行事を行った。キャンパスツアーの後、私たちから、「日本の食文化の歴史、現在と未来」、そして「日本のカーボンニュートラルに向けたエネルギー転換」に関するプレゼンテーションを行った。交流セミナーの後、大学近所のレストランで交流会を行った。

(写真4) 慶尚大学での交流セミナーの様子



(写真5) 慶尚大学での交流会の後、レストランの前での集合写真



5. 全州でビビンバ作り体験（9月6日 12:00~14:00）

韓国の料理文化に触れるために、ビビンバの発祥地である全州でビビンパづくりの体験を行った。ビビンパは、韓国料理の代表的な一品であり、その多彩な具材と調味料の組み合わせが印象的でした。ビビンパづくりの職人さんから野菜、ごはん、たんぱく質源、そしてコチュジャン（韓国の辛味調味料）の組み合わせお方法を教えてもらい、一つの美味しい料理に仕上げるプロセスは、調理の芸術とも言えるものであった。

(写真6) ビビンバの発祥地である全州でビビンパづくりの体験



6. 水野さんのツリーハウス訪問（9月6日 15:00～17:00）

韓国でカフェ、宿泊施設、小道具店、木工体験などの経営を行う日本人の水野さん。元々は水野さんが韓国の奥さんと娘さんたちと暮らすために廃家韓屋を改造しが、ジブリの世界観と似ていると SNS やテレビで紹介され、話題となり、週末にはカフェに 150～200 人ほどのお客さんが来店する人気店になった。自然に囲まれたツリーハウスやカフェが癒やされるリラックスできる空間でとても印象に残った。店内もいろんな小物が置いてあって日本を感じさせる空間がとても良かった。水野さんが自分のやりたいことをやって、楽しく生きている様子が記憶に残り、印象的であった。

(写真 7)水野さんのツリーハウスの入り口



(写真8)水野さんのツリーハウスの中のカフェで、水野さんが学生たちに自分の人生経験を語っている様子



7. セマングム広報館訪問 (9月7日 10:00～12:00)

セマングム広報館は、全羅北道群山市・扶安市一帯に干拓史上類例のない防波堤で、東北アジアの経済中心となるためとして開発が進められているセマングム事業の広報のために設置されたものである。セマングムの事業面積は409 km²、所要工事は防潮堤33.9 km、排水門2か所、防水定62.1 kmで、世界最大規模の干拓地であるといわれている(総工事費約2兆9,000億ウォン)。開拓用地では、農生命用地や産業・研究用地、環境・生態用地だけでなく、国際協力用地や観光・レジャー用地としても施設される予定である。工事が進められている間、環境汚染問題が提訴され、セマングム干拓事業に対する可否論争が起こり、工事が一時中断する事態もあった。そのため、環境団体等の反対運動に対して様々な環境保全の対策を行ってきた。今後、セマングムの将来の都市成長を効率的に支援し、低炭素グリーン成長を実現できるエコ公共交通中心のグリーン交通システムの構築を目指している。

(写真 9) セマングム事業の現在と未来を説明してもらっている様子



(写真 10) セマングム事業に関する説明終了後に職員さんと一緒に集合写真



8. 高麗大学との交流セミナー（9月8日 15:00～20:00）

高麗大学でのキャンパスツアー後に交流セミナーを行い、レストランで交流会を行った。翌日には、高・延戦のラグビー観戦をした。交流セミナーでは、「汚染水」の海洋放出と韓国の社会的な葛藤について講義を聞いた。なぜこのような問題がおきているのか、メカニズムや韓国の人々の反応まで詳細に知ることができた。賛否両論はあり、人によって考えも違うので一概にこれが正解とは言えないが、このような社会問題に関心や考えを持つことが大切だと感じた。

（写真 11）高麗大学の広報大使学生からキャンパス案内をしている様子



（写真 12）高麗大学での交流セミナーの様子



(写真 13) 高麗大学近所のレストランで交流会の様子



9. 烏頭山統一展望台訪問 (9月9日 14:00~18:00)

烏頭山統一展望台は京畿道坡州市炭炭面にある北朝鮮区域に臨む展望台である。民間人統制区域にある韓国軍管理下の都羅展望台と異なり、民間の韓国人も含め、事前の許可なしに自由に立ち入ることができる。韓国の人も、北朝鮮の人も同じ人種で同じ言葉を話すのに、この柵が2つの国を作り出している。この柵を見たときにこの残酷な現実を実感し、とても胸が痛くなった。

実際に望遠鏡で北朝鮮の様子を観察してみたが、農業をしている様子が観察できた。日本と比べてみると、高さのある建物があまりない、店が少ないという印象を持った。観察できた地域が地方だったのかもしれないが、あまり開発が進んでおらず発展していないように感じた。この烏頭山統一展望台からは、平和と緊張感が共存した、なんともいえない雰囲気を感じ取ることができた。自分が基本的には戦争等とは遠い生活を送ることができているありがたみを感じるとともに、如何に自分が平和ボケしているかが良くわかる良い機会であった。

(写真 14) 北朝鮮が目の中の鳥頭山統一展望台で、南北分断の現実について説明してもらっている様子



10.韓国国立中央博物館訪問（9月11日 10:00～12:00）

韓国国立中央博物館では、約41万点以上の遺物が所蔵されており、その中で約1万5000点が展示されている。1階の2館旧石器時代から大韓民国までの朝鮮半島の歴史に関わる展示がされている。先史、古代館では、旧石器時代から朝鮮半島を統一した高麗の前までを扱っており、原始的な道具から徐々に進歩していく様子が確認できた。石器は日本のものと比較して大きな違いは見られなかったが、技術が進歩するにつれ、独自性が出てくることに気が付いた。

土器がその代表例であり、特に、高麗青磁には目を奪われた。趣向を凝らした細工が施されており、目を疑うものばかりであった。伽耶の土器は、当時からの日本との交流を示すものとして展示されているようだ。また、新羅時代の金冠、伽耶の時代のイヤリングなどの装飾品はおしゃれなものが多く、現代的であると感じた。歴史の教科書で見た国の名前や戦争の名前、年号などを聞いて、改めて日本との古くからの繋がりを感じた。展示されているものも日本の博物館や教科書に掲載されているものも多く、韓国の歴史のみならず、アジア全体の文化の知見を深めることができたと思う。

(写真 15) 韓国国立中央博物館で、専門職員から博物館の展示状況について説明をしてもらっている様子



11.ソウル市エネルギー公社訪問（9月11日 15:00～17:00）

ソウルエネルギー公社では、ソウル市のエネルギー管理をするために設置された機関である。現在は、ソウル市のゼロカーボン達成するために様々な工夫が行われている。最近では、太陽光を利用したゼロカーボンの取り組みが多く実施されていた。そんな中で私たちが特に印象的だったのが様々な種類の太陽光パネルである。例えば、太陽光パネルを壁や屋根に取り付けるという従来の方法ではなく、最初から壁と一体化している太陽光パネルがあった。またそれらの太陽光パネルは自動で動き効率よく太陽光を吸収することが出来る。他にもベンチに太陽光パネルが付けられており、その発電によってスマホの充電が出来るものもあった。また、大企業ばかり連携するのではなく、高い技術を持った中小企業やベンチャー企業を採用しているという話を聞き、広い視野で事業を行っているということに感心した。

(写真 16) ソウルエネルギー公社で、職員さんから壁に角度をつけてより効率的に発電を行うために設置された太陽光パネルについて説明してもらっている様子



(写真 17) ソウルエネルギー公社が設置しているベンチの太陽光パネルから充電された電気をスマホの充電に使える様子



プログラム名	建築都市デザイン国際交流研修
開催場所	チュラロンコン大学（タイ）
開催期間	2023 年 8 月 13 日（日）～ 2023 年 8 月 20 日（日）

協定校であるチュラロンコン大学建築学部ランドスケープアーキテクチャー学科と国際ワークショップを実施した。主催はチュラロンコン大学であった。参加者は名城大学から大学院生 4 名、学部生 3 名と引率教員 1 名、チュラロンコン大学からは大学院生 2 名、学部生 5 名、ホスト教員 1 名の計 16 名である。

ワークショップでは「Climate adaptation and the efficiency of designing urban parks as cooling spots in the CBD」のテーマのもと、両校混合のグループで設計提案を行った。その過程で対象となった都市公園の踏査、データ分析を行い、中間発表会と最終発表会を開催した。グループでの活動を通して、異なる専門分野の学問領域への相互理解と協働作業による相乗効果ならびに異文化交流を体験することができた。グループでの設計課題の活動以外にも専門家による英語による講義・討論が行われた。またバンコク郊外の文化・生活を体験するツアーにも参加した。これら全体の活動に参加することにより英語のコミュニケーションとプレゼンテーション能力が向上した。

研修に参加した学生は、引率教員が思っていた以上にタイの学生と積極的にコミュニケーションを行っていた。SNS により海外に住む人々との交流がしやすくなったこともあり、今回の研修終了後も相互に交流が続きそうな様子であった。よって学術的な研鑽のみでなく継続的な国際交流へ繋がる有意義な研修であった。



プログラム名	アジアから学ぶ水辺空間を活用した都市づくり -環境にやさしい都市の在り方について考える-
開催場所	タイ、バンコク
開催期間	2023 年 8 月 11 日（金）～8 月 17 日（木）

本プログラムは、本学理工学部が学部間協定を締結しているタイのチュラロンコン大学建築学部ランドスケープ建築学科との合同ワークショップを目的に、7名の学生参加のもと実施した。プログラム名にあるように、タイは気候帯も関連し、降水量が多いことから大小多くの河川ならびに水路を有している。このような気候的、地理的特徴もあり、同国は水辺空間を活用とした都市づくりならびに雨水の有効活用に取り組んできている。

上記を念頭に、本プログラムでは、バンコク市内の大規模河川であるチャオプラヤ川ならびにその他小水路等の親水空間としての有効活用のされ方について視察を行った。これら河川の公共交通としての利用ならびに、河川を中心とした都市開発のあり方として、近年にオープンしたアイコンサイアムを訪問し、バンコク特有の水辺空間の在り方について体験することができた。

また、雨水の有効活用については、チュラロンコン大学の Centenary Park を対象に現地調査を実施した。同調査対象は、近年に建設された大規模貯水槽を有する人工地盤上に建設された都市型公園であることから、周辺気温への影響も期待されている。そのため、チュラロンコン大学との合同ワークショップの一環として、気温と風向風速の定点測定を滞在期間中実施した。

測定後は、屋外気温の研究事例についてチュラロンコン大学の学生を対象としたセミナーも開催した。なお、同セミナーは理工学部建築学科と訪タイ期間が一部重なったことから合同開催とした。

最後に本研修プログラムに参加した学生の大部分は初の海外体験であり、渡航当初は異国に困惑している様子もあったものの、日時の経過とともに適応していく様子を垣間見ることができ、参加学生の成長を実感することができた。以上のことから成果のある有意義な研修プログラムであったといえる。



和 5



報告書

令和 5 年 8 月 21 日

サンフォード大学薬学部 of 海外臨床薬学研修に引率をして

亀井浩行

本年、2019 年以来、サンフォード大学薬学部での臨床薬学研修が再開され、大学院生 1 名、学部生（6 年生）2 名の計 3 名の引率を行ったので、以下に報告する。サンフォード大学薬学部（1927 年開設）とは、1994 年から 29 年間、本 exchange program を実施している。

臨床薬学研修の日程は、8 月 6 日（日）から 8 月 14 日（月）の期間で、旅程は 8 月 6 日中部国際空港出発し、羽田-ヒューストンを経てアラバマ州バーミングハムに問題なく予定通り到着した（現地 8 月 6 日 14 時 30 分）。宿泊施設はサンフォード大学から車で 10 分ほどのアクセスの良いホテル（Aloft Birmingham Soho Square）であった。到着後、サンフォード大学薬学部の Thomas 先生（専門臨床領域は循環系 ICU）にホテルまで送迎していただいた。Thomas 先生は 6 年前に赴任され、お会いするのは初めてであったが、非常に親切丁寧にご対応いただいた。なお、Thomas 先生は、アリゾナ大学の Katz 先生とレジデント時代に知り合い、よくご存知であった。

最初に、新たに様変わりしたサンフォード大学薬学部の概要を紹介する。薬学部は、多職種連携教育（interprofessional education:IPE）を重視し、IPE の質をより高めるために、2016 年に創生されたサンフォード大学 College of Health Sciences の中の一つの School として、キャンパス内に造られた校舎に移転し、キャンパス内の多職種連携によるシミュレーション教育にも注力している。College of Health Sciences では一つの校舎の中に以下の 4 つの医療系 School が集結している。さらに、それぞれの学科を有しており、ここでは紹介仕切れないが大学院も含め、計 30 プログラムが可動している。

1. [McWhorter School of Pharmacy](#)（4 年制 Pharm D; college2 年と合わせて計 6 年）

- Department of Pharmacy practice（臨床系教員 24 名）
- Department of Pharmaceutical, Social and Administrative Sciences（基礎系教員 17 名）

*1 学年 100 名で各学年の留年率は 10-20%であり、本学と同様、同一学年は 2 回まで認められる。

2. [School of Health Professions](#)

- Physician Assistant(医師アシスタント; 4+27 か月 Dr)

*医師の監督の下に診断や薬の処方、手術の補助など、医師が行う医療行為の一

部をカバーする医療資格者(日本には存在しない)

- Physical Therapy (理学療法士; 4+3 年 Dr)
- Communication Sciences and Disorders (言語療法士; 4 年制 BS)
- Speech -Language Pathology (言語聴覚士; 4+2 年 MS)
- Kinesiology (身体運動学; 4 年制 BS)

*日本では馴染みがない。

3. [Moffett & Sanders School of Nursing](#)

- Nursing(看護師; 4 年制 BS)
- Nurse Practitioner (4+3 年 Dr)

*看護師の基盤を有し、医師の指示を受けずに一定レベルの診察や治療（処方権も有する）を行う医師と同等レベルの医療資格者（日本では Nurse Practitioner に相当する特定看護師も養成されようとしているが、現時点では診察や処方まではできない）

4. [School of Public Health](#)

- Nutrition and Dietetics (栄養士; 4 年制 BS)

以上、1つの校舎の中で、薬学生は、主に看護師、医師アシスタント、理学療法士、栄養士の学生たち、さらには近隣のアラバマ州立大学医学部の医学生を迎えて、1年次から継続してより臨床現場を意識した実践的な IPE を実施している。

本研修の1日目は Crouch 学部長へのご挨拶・記念撮影（写真1）、キャンパスツアー（写真2）、米国およびサンフォード大学での薬学教育、米国の卒後教育（レジデント制度）、複雑な健康保険制度の講義（写真3）を受講した。特にサンフォード大学での臨床実習は、早期体験（IPPE）では、1年次に薬局にて3週間、2年次に病院にて3週間、単に見学ではなく実際に研修を行う。4年次（最終学年）では臨床研修（クラークシップ）を必須領域での4ローテーション（薬局、病棟、外来、クリニックなど1施設につき4-6週間）および選択可能な4ローテーション（海外研修を含む）の年間8ローテーションで実施する。また、卒後研修として PGY1 及び PGY2 のレジデント制度も病院希望の学生には必須であり、年々その難易度が高くなっている。

2日目の研修は午前中1つと午後に2つ、計3つの薬局に訪問した。1日目(Rock Creek Pharmacy)と2日目(FMS Pharmacy; 写真4)の薬局は、米国の CVS のような大型のチェーンドラッグではなく個人薬局(Independent Pharmacy)であった。比較的小さな薬局であったが、機械化が進んでおり、自動調剤機(ボトル調剤)や自動カメラやバーコードなどを用いた調剤監査などが活用されていた。患者の処方箋も全体の9割が病院やクリニックからの電子メールで受け取り、ペーパーレス化も進んでいる。一方、患者との面談室(個室)も設置されており、患者相談・患者教育も積極的に行われていた。3日目の薬局(Solution Infusion)は、点滴(輸液)(抗がん剤、バンコマイシンなどの抗生物質、栄養剤)のみ調製する薬局で、日本では決してみられな

い薬局の形態も知ることができた。この薬局では近隣の大学病院など3施設から、入院ではなく自宅にて治療を希望する患者の注射箋を受け取り、個々の患者の製剤を調製し、自宅で操作可能な点滴装置もセットで病院に納めている（1週間で100件、調剤テクニシャンが主に実施）。

3日目の研修では、午前中はサンフォード大学3年生の2名の学生による学生生活などを中心としたプレゼンテーションを受講した。学生2名の大学生活ではほぼ勉強中心で、午前8時から午後1時まで授業に出席し、その後、予習・復習、課題を毎日平均6時間、自主学習していることに驚いた。

学費が今では年間4万ドル(約560万円)とのことで、学生ローンを利用しているが、週末での薬局や病院でのアルバイトなどで生活費を得ている。また、勉強やアルバイトだけでなく、積極的なボランティア活動の参加や諸外国の薬学生（英語圏）とも定期的に交流しており、非常に活発な学生生活を送っている。日本の学生、本学の学生の物足りなさを実感し、聴講した本学の学生たちも刺激を受けていた。学生のうち1名は（男性）は2か月間東京に滞在していたこともあり、日本語で少し日常会話が可能で再来年には国際ローテーションにて来名したいと希望していた。午後は学部生の2名はサンフォード学生2名とともに観光やショッピングに出かけ、大学院生は別メニューで私とともに精神科専門薬剤師でもある Cates 先生（私と15年以上の知り合い）の学生3名から、精神科症例の報告をしていただき、米国の病棟における薬剤師の役割などの説明を聴講した。さらに、現在行っている精神科での臨床研究について紹介し、Cates 先生から貴重なコメントもいただき、有意義な討議を行うことができた。

4日目の研修では、午前は日本ではあまり馴染みのないリハビリテーション病院（Encompass Health）を訪問した(写真5)。Stroke 後の患者が多いが、身体機能回復に向けた実際の生活場面（車に乗り込む動作の修得など）での訓練などが行われていた。サンフォード大学薬学生3名が研修しており、入院時の患者薬剤情報などの把握はもちろんであるが、担当患者の機能回復訓練に障害を及ぼすような日中の眠気や動作の障害となる薬剤の調整や切り替えなどを積極的に提案しているのが印象的であった。本学の学生が3名のサンフォード学生にそれぞれつき、担当症例について説明を受け積極的に質問していた。また、午後は、シミュレーション教育の施設

（Experiential Learning and Simulation Center）を見学した。実際の病院のそのものフロアーが1フロアー（診察室、集中治療室、廊下の幅と色まで実際の病院の構造と同じ）造られており、診察室（10室）や患者ベッド（計20；実際にシミュレーターのロボットが20体設置）が備え付けられており(写真6)、看護学生や医師アシスタント（日本では存在しません）などの学生も使用し、各職種の学生の実践的なIPE教育としても活用している。また、実際に高精度のロボットを備えたICU室、手術室、小児、妊婦の病室が再現されており、学生たちは実際にICUのシミュレーター室で救急

処置の経験をさせていただいた。マジックミラーで目隠しされた裏側の部屋から教員が患者ロボットのバイタルサインなどを PC で操作しながら、患者役として声を出したり、もう一人の教員がお手本として、高精度の患者ロボットへの呼びかけや救急処置を行った(写真 7)。日本にない規模（世界で 300 施設の内の一つとして）のシミュレーション教育が行われているのが非常に印象的であった。このようなシミュレーション教育は、臨床研修前の学生の不安を軽減するだけでなく、自信と成長を促すものである。

本研修の最後 5 日目は、午前中は外来における薬剤師の役割の講義を受け、午後に実際に病院外来（Brookwoodbaptist Primary Care）を見学した。米国では新たに Clinical Pharmacist Practitioner (CPP) という医師のような診断以外すべて（処方や検査オーダーなど）ができる医療資格者として、各領域の専門薬剤師よりも上のクラスの薬剤師を養成しており、その積極的な取り組みに感銘した。

最後に校舎内で Closing Ceremony を開いていただき、Crouch 学部長、Thomas 先生を含め 8 名の教員に出席いただき、サンフォード大学からの記念品と、Crouch 学部長（写真 8；右から 2 人目）からは各学生に修了書を一人一人に丁寧に手渡された。来年も継続してこのプログラムに参加させていただくこと、可能なら 6 月にお願いしたいこと、来年の 1 月に 2 名までサンフォード大学の薬学生を受け入れさせていただくことを約束、申し伝え、最後に私から、本研修にご尽力された Thomas 先生を初め、Crouch 学部長、各教員の先生方への御礼、3 名の学生からは各々、研修に参加させていただいた印象と御礼の言葉を述べ、Closing Ceremony を終え、惜しみながら研修プログラムを終了した。学生たちは日々、講義や訪問先で積極的に質問し、毎日、ホテルでの振り返り・情報共有も活発に行っていたことから、彼らにとって有意義な研修であったものと思われる。

翌日は、Thomas 先生（写真 8；右から 5 人目）にアラバマ州北部にある US Space and Rocket Center に観光に連れて行っていただき、学生たちも大変楽しんでいた。Thomas 先生には、本研修のプログラムの作成、準備から、空港への送迎、毎日の大学までの送迎、夕食（2 日に 1 回）にも誘っていただき、常にご親切にお世話していただき、心より感謝申し上げたい。8 月 13 日（日）早朝に Thomas ご夫妻に空港まで送っていただき、8 月 14 日（月）午後 7 時 30 分に少し遅延したが、台風の中、無事帰国した。

謝辞：最後に、本研修に行うにあたって、ご支援いただいた後援会、神野学部長、国際交流委員会の教職員の皆様に深謝致します。

以上

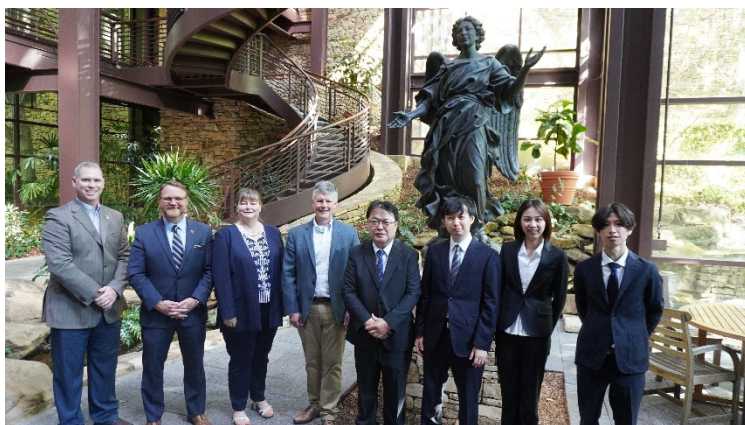


写真 1. Dr.Crouch 学部長らと記念撮影

(左から Dr.Thomas、Dr.Crouch 学部長、Dr.Dugan 臨床部門長、Dr.Hendrickson 研究部門長)



写真 2. キャンパスツアー



写真 3. サンプルード大学臨床教員による講義



写真 4. FMS Pharmacy で薬剤師から説明を受ける学生たち



写真 5. Encompass Health 病院でのサンフォード大学薬学生 3 名と学生たち
(写真左端; サンフォード大学臨床教員 Dr. Thomason)



写真 6. Experiential Learning and Simulation Center



写真 7. Experiential Learning and Simulation Center での ICU Lab
(右端; サンフォード大学臨床教員 Dr. Beall、手前; Dr. Thomas)



写真 8. Closing Ceremony を終えて記念撮影

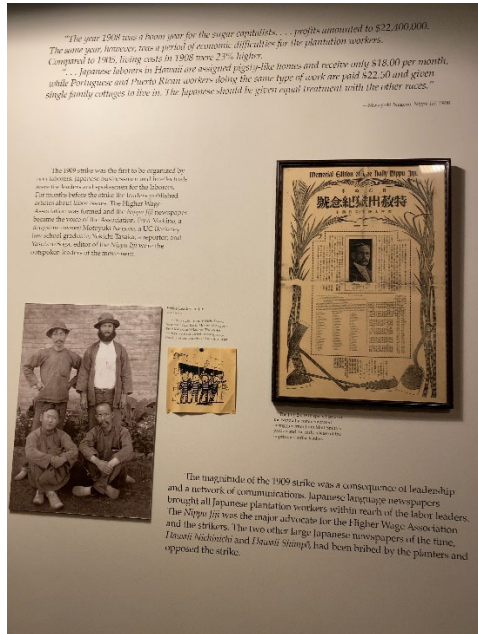
プログラム名	ハワイ海外研修
開催場所	アメリカ・ハワイ州
開催期間	2023 年 9 月 6 日（水）～ 2023 年 9 月 13 日（水）

今回の海外研修では、参加者 6 名のうち 4 名が初の海外渡航であったことから、引率教員を 2 名とした。学内の事前研修では、グローバルプラザの Apolonia 先生にご協力いただき、入念に入国審査のロールプレイングも行った (<https://youtu.be/-Enx767ffDs>)。9 月 6 日（水）ホノルル国際空港では、問題なく入国審査を通過することができた。9 月 7 日（木）のテーマは「日系人の歴史とハワイ文化を学ぶ」として、まずは日本文化センター（JCCH）を訪問し、展示物や記録映像によりハワイにおける日系移民の歴史を学んだ。学生らのレポートでは「元年者 [ガンネンモノ]」「日本からの出稼ぎ」「戦時下の強制収容」といった展示が強く印象に残ったとのこと。その後、ホノルル美術館にて、Hawaiian quilt など現地らしい芸術も鑑賞。9 月 8 日（金）は、「法律勉強 DAY」と位置付け、ハワイ大学ロースクールを訪問した。まずは、9:00 からの 2 時間半、マーク・レビン先生による「アメリカ法入門」という LLM（留学生向け課程）の講義を聴講した。日本人学生らは、留学生と教授との対話による授業法（ソクラテック・メソッド）にも関心を抱いていた。その後、「環境法」のウォルズグロブ先生にもお目にかかり、キャンパス内の食堂でランチ、学内書店で大学グッズを購入し、午後からはロースクール図書館を見学した。その後、イオラニ宮殿にてハワイ王朝と法制度の歴史を音声ガイド付で学んだところ、想定よりも時間がかかり、州最高裁判所は外観のみの視察となった。9 月 9 日（土）は、ハワイの環境と自然を学ぶべく、ダイヤモンドヘッドから自然と都市開発の様子を確認し、地元マーケットで自然を生かした SDGs 商品群を観察した。9 月 10 日（日）のみ、各自で自由研修とした。帰国前日となる 9 月 11 日（月）、パールハーバー、または、ポリネシアカルチャーセンターの二組に分かれ、それぞれ大きな視点から環太平洋地域の歴史や文化を学んだ。

以上に関わる写真や詳細については、2 枚目以降を参照のこと。

参考資料 1：写真

- ・ハワイ州日本文化センターにて、日本移民の歴史を学ぶ



- ・ハワイ大学ロースクールの講義「アメリカ法入門」聴講（1 コマで 2 時間半！）、休み時間に一息



- ・ダイヤモンドヘッド、ホノルルの都市開発の様子が分かる



- ・パールハーバーにて真珠湾攻撃の歴史を学ぶ



- ・ポリネシアカルチャーセンターにて文化の相違を考察、ハワイの伝統的な食事も



- ・ホテル内のコインランドリー、このホテルは元学生寮だった：フロントにて 5 ドル札などを大量の 25 セント硬貨（クォーター）に両替してもらい、コインランドリーを使うことも、英会話と海外生活の練習になる。



- ・参考資料2：ハワイ大学ロースクール「アメリカ法入門」当日のシラバスと予習課題

William S. Richardson School of Law
INTRODUCTION TO AMERICAN LAW (LWLM 570)

II. Overview of American Legal System(s)

B. Deeply resonant traditions in U.S. and Hawai'i Law

2. The Anglo-American Common Law Tradition and its lasting impact

Sept. 8: The Anglo-American Common Law Tradition and its lasting impact

U.S. law, especially at the state level, has been profoundly impacted by the Anglo-American Common Law tradition. Not all elements of law in the U.S. derive from the Common Law, and in fact, most U.S. law – at the state and federal level – derives from enacted legislation, just as laws do in Civil Law nations. Nevertheless, the impact of the tradition permeates American legal systems in terms of methodologies of legal education, understandings of judicial authority and jurisprudence, jury engagements, and in countless other ways.

We'll begin by looking briefly at the history of the Common Law in England, its migration to the U.S., and its adoption within U.S. states (including Hawai'i). How and why was it adopted after the Norman Conquest in England? What political role did it accomplish? How do we find it in Hawai'i today?

From there, we'll explore the nature of the common law as a part of the judicial process in the U.S.? Cases and case law analysis are central to U.S. law and legal education. How do we establish substantive rules in our common law regimes (such as contracts, torts, and real property) through judicial operations without legislation? One must understand our principles of *stare decisis*, including their limitations.

Finally, we'll consider how the Common Law tradition more broadly affects American law. As mentioned above, and perhaps as you've already observed in your time here, it affects legal education, understandings of judicial and lay authority, jurisprudential theory, etc.

Reading:

Read Wikipedia, [Norman Conquest of England](#), from to the beginning of the Table of Contents. This is just 3 paragraphs. You can probably also find brief writings about the Norman Conquest in your own native language on Wikipedia.

Read Burnham, pp. 44 – 46 (Section B. Common Law, Part 1, A Very Brief History) on Laulima.

Read Reynolds, pp. 7 – 11 (Section 2.3: The Common Law – A Very Brief History) on Laulima.

Read Kempin pp. 3 – 16 (The Common Law and the Civil Law; Statutes in Common-Law Jurisdictions) on Laulima.

Read Johns and Perschbacher, pp. 111 – 118 (§3.3.3 Areas of State Law, §3.3.4 Continuing Evolution of the Common Law, §3.4.1 The Doctrine of *Stare Decisis*) on Laulima.

How can law derive from judicial precedent without any statutory authority? Does this seem right for you? Is this similar in your home country?

What role do statutes play in the U.S. legal systems? Is their role large or small? How do statutes exist together with common law rules?

How has the Common Law tradition affected U.S. law more generally? What impacts can we see on legal education, understandings of judicial (and lay) authority, jurisprudential theory, etc.?

You had a legal research task for our class today. Please be prepared to talk about your experience. What research tool did you use – www.capitol.hawaii.gov, Lexis, or Westlaw? How did that work for you?

プログラム名	グローバルエンジニア育成のためのタイ研修
開催場所	タイ
開催期間	2023年8月7日（月）～8月16日（水）

本学の海外協定校であるラジャマンガラ工科大学タニヤブリ校（以下RMUTT）キャンパス内のホテルに滞在しながらタイの同世代学生たちと交流し、現地講義の参加や実習を体験するとともに、日系企業の海外拠点やローカル企業、スラム街の福祉施設などを訪問し、工場やスポーツ施設や教育現場の視察、外国人スタッフとの交流をした。4年ぶりの学生引率の海外研修であったが、10日間、10人の学生が安全に無事に渡航することができ、学内外のご協力に感謝している。

August, 2023

- 7 Mon TG645 11:00 Nagoya 15:00 Bangkok, Check in Rajabongod
- 8 Tue Campus tour, Exchange party with RMUTT students
- 9 Wed 10:00 Thai Cooking Class, 13:00 Lecture at Color Research Center
- 10 Thu Company visit tour to Chonburi (TT FTS, Toyoda Gosei Asia)
- 11 Fri 10:00 Thai Dance Class, 14:00 BG Stadium tour
- 12 Sat Cultural tour to Ayutthaya with RMUTT students
- 13 Sun Move from Kho Khot to PhayaThai, Siam, Jodd Fairs
- 14 Mon Cultural tour in Bangkok
- 15 Tue 10:00 Child center, 14:00 Toyota Boshoku Asia
- 16 Wed TG644 00:05 Bangkok 8:00 Nagoya



国際フィールドワーク ベトナム実施報告

2023 年 9 月 1 日~8 日(8 日間)

経済学部 教授 佐土井有里

協定校：ハノイ経営工科大学 Hanoi University of Business and Technology

経済学部国際フィールドワーク授業として、ベトナム国際フィールドワークを 2023 年 9 月 1 日~8 日(8 日間)実施した。この研修は、前期授業を通してベトナムに関する歴史、文化、経済、企業活動、価値観等多方面から事前研修を行い、現地研修に臨んだ。また、現地での協定校ハノイ経営工科大学との学生交流会や発表会に向けての学生達のプレゼンテーションも事前研修中に作成・英語発表練習し、現地発表を行った。

現地プログラムとして、①大学生との交流プログラム、②現地企業訪問調査やインターンシップ、③歴史・文化・自然遺産や施設見学の 3 方面からの内容で構成した。

①大学生との交流プログラムでは、協定校であるハノイ経営工科大学 Hanoi University of Business and Technology (HUBT)の Prof. Quan, Dr. Hieu を中心にプログラムを準備していただいた。

まず、学生交流会「Special Cultural Values of Vietnam and Japan」9 月 4 日 13：30~17：00（別紙プログラム）では、ベトナム・日本双方の学生達が英語でプレゼンテーションを行い、双方の文化や価値観の相違点とその理由や背後にある歴史や考え方について自由に討議を行った。

学生同士との交流会として、9 月 4 日には、ハノイ郊外の伝統陶芸村 Bat Trang Village を HUBT の学生達に案内してもらい、実際にろくろを使った陶芸体験で茶碗等を製作し、その後陶芸村のマーケット巡りを楽しんだ。また、Vietnam National University, School of Interdisciplinary Studies の学生達にもハノイの旧市街を半日 Walking tour として学生達に案内していただき、2 校のベトナム学生達との学生生活や楽しみ方を体感した。

②現地企業訪問調査については、「日本で就労した経験を持つベトナム人がベトナム帰国後起業して成功している企業」というテーマで HUBT 研究者達と共同研究を行い、現地企業訪問調査・インタビューを実施した。「Yamaguchi Vietnam」精密機械加工企業「STI Vietnam」IT/AI 生産管理企業という 100%ベトナム資本の企業 2 社を訪問し、社長や社員にインタビューし、いかにしてベトナムの起業家が日本で学んだ就業経験を元に起業をし、経営を成功させているのかについて学んだ。

次に住友電装の現地法人 Sumi Vietnam Wiring System にて 1 日インターンシップを体験した。この企業は名城大学経済学部佐土井ゼミ卒業生が経理部長として駐在している関係から、学生たち用にインターンシッププログラムを準備していただいた。自動車用ワイワリングハーネスを製造する従業員 5000 名の工場で、企業概要説明、工場見学ののち、学生たちは課題を与えられ、最後に社長・副社長に向けて発表するというプログラムであ

った。課題は「5000 人の社員食堂で出るフードロス削減方法を考える」で、食堂での残飯状況や問題点等をベトナム人福利厚生（食堂）担当の社員等に聞き取りを進めながら考え、提案内容を纏め、最後に幹部に向けて発表することができた。

③歴史・文化・自然遺産についても、戦争博物館等でベトナム戦争等ベトナムの歴史を学び、ハロン湾等の世界遺産や豊かな自然遺産、更には近年の経済発展とベトナム人の活力を学ぶことができた。

本研修において、HUBT の大学関係者や企業関係者の方々から多くの協力を得ることができ、ご協力いただいたすべての方々に深く感謝する。この研修をもとに両国の学生達が共に学び、今後の協力と発展に寄与してくれることを期待する。

国際フィールドワーク ベトナム実施報告

2023 年 9 月 1 日~8 日(8 日間)

経済学部 教授 佐土井有里

協定校：ハノイ経営工科大学 Hanoi University of Business and Technology

経済学部国際フィールドワーク授業として、ベトナム国際フィールドワークを 2023 年 9 月 1 日~8 日(8 日間)実施した。この研修は、前期授業を通してベトナムに関する歴史、文化、経済、企業活動、価値観等多方面から事前研修を行い、現地研修に臨んだ。また、現地での協定校ハノイ経営工科大学との学生交流会や発表会に向けての学生達のプレゼンテーションも事前研修中に作成・英語発表練習し、現地発表を行った。

現地プログラムとして、①大学生との交流プログラム、②現地企業訪問調査やインターンシップ、③歴史・文化・自然遺産や施設見学の 3 方面からの内容で構成した。

①大学生との交流プログラムでは、協定校であるハノイ経営工科大学 Hanoi University of Business and Technology (HUBT)の Prof. Quan, Dr. Hieu を中心にプログラムを準備していただいた。

まず、学生交流会「Special Cultural Values of Vietnam and Japan」9 月 4 日 13：30~17：00（別紙プログラム）では、ベトナム・日本双方の学生達が英語でプレゼンテーションを行い、双方の文化や価値観の相違点とその理由や背後にある歴史や考え方について自由に討議を行った。

学生同士との交流会として、9 月 4 日には、ハノイ郊外の伝統陶芸村 Bat Trang Village を HUBT の学生達に案内してもらい、実際にろくろを使った陶芸体験で茶碗等を製作し、その後陶芸村のマーケット巡りを楽しんだ。また、Vietnam National University, School of Interdisciplinary Studies の学生達にもハノイの旧市街を半日 Walking tour として学生達に案内していただき、2 校のベトナム学生達との学生生活や楽しみ方を体感した。

②現地企業訪問調査については、「日本で就労した経験を持つベトナム人がベトナム帰国後起業して成功している企業」というテーマで HUBT 研究者達と共同研究を行い、現地企業訪問調査・インタビューを実施した。「Yamaguchi Vietnam」精密機械加工企業「STI Vietnam」IT/AI 生産管理企業という 100%ベトナム資本の企業 2 社を訪問し、社長や社員にインタビューし、いかにしてベトナムの起業家が日本で学んだ就業経験を元に起業をし、経営を成功させているのかについて学んだ。

次に住友電装の現地法人 Sumi Vietnam Wiring System にて 1 日インターンシップを体験した。この企業は名城大学経済学部佐土井ゼミ卒業生が経理部長として駐在している関係から、学生たち用にインターンシッププログラムを準備していただいた。自動車用ワイリングハーネスを製造する従業員 5000 名の工場で、企業概要説明、工場見学ののち、学生たちは課題を与えられ、最後に社長・副社長に向けて発表するというプログラムであ

った。課題は「5000 人の社員食堂で出るフードロス削減方法を考える」で、食堂での残飯状況や問題点等をベトナム人福利厚生（食堂）担当の社員等に聞き取りを進めながら考え、提案内容を纏め、最後に幹部に向けて発表することができた。

③歴史・文化・自然遺産についても、戦争博物館等でベトナム戦争等ベトナムの歴史を学び、ハロン湾等の世界遺産や豊かな自然遺産、更には近年の経済発展とベトナム人の活力を学ぶことができた。

本研修において、HUBT の大学関係者や企業関係者の方々から多くの協力を得ることができ、ご協力いただいたすべての方々に深く感謝する。この研修をもとに両国の学生達が共に学び、今後の協力と発展に寄与してくれることを期待する。



WORKSHOP PROGRAM

A. Time: 13:30-16:30, Tuesday 5th September 2023.

B. Place: Room A204, Hanoi University of Business & Technology

C. Workshop Language: English

D. Contents:

Time	Content	Indicator
13h30-13h40	Opening speech	Assoc.Prof.Dr. Nguyen Manh Quan – Director of INBUS Prof. Dr. Yuri Sadoi – Faculty of Economics, Meijo University
13h40-13h45	Introduce about Meijo University	Prof. Dr. Yuri Sadoi – Faculty of Economics, Meijo University
13h45-14h00	Presentation of HUBT: Traditional costume of Vietnam: Ao Dai	Group 1 - HUBT
14h00 – 14h45	Presentations of Meijo: - Japanese unique manners - Japanese annual events and background - Japanese daily lives shown in Japanese Animation	Students of Meijo University
14h45-15h00	Vietnam Traditional Lunar year - A unique traditional cultural custom of Vietnam	Group 2 - HUBT
15h00-15h30	Presentations of Meijo: - Japanese traditional cuisine - Marketing strategy of limited edition products	Students of Meijo University
15h30-15h45	Traditional Vietnamese food	Group 3 - HUBT
15h45 – 16h20	Discussion and Q&A Student exchange	
16h20 - 16h30	Close	Preside

2023年8月17日から23日まで、経営学部国際フィールドワーク（台湾）の現地研修を行った。参加者は現2年次生と3年次生で、合計7名であった。

17日から19日までは、協定校である真理大学の協力を得て、真理大学の学生との交流を中心に、淡水、台北の歴史、文化を体験し、さらに台湾経済の現状についても、真理大学林冠汝先生の講義を受けた。

20日から23日までは、協定校である国立台中科技大学の協力を得て、台中科技大の学生との交流を中心に、台中の企業訪問および台中科技大の黎立仁先生の台湾経済と日本経済に関する講義を受けた。

このFWの一番の趣旨は本学経営学部の学生と台湾の学生との直接交流である。真理大学、国立台中科技大学は両校ともに本趣旨を深く理解し、今回の学生間の直接交流は大成功であったと認識している。

帰国後は、「今回のFWで何を学んだか」というテーマでレポート提出を義務付けた。レポートの内容は、参加者それぞれが、現地研修ならではの成果を持って帰国したことがよく分かるものであった。



プログラム名	多言語を用いた非英語圏での国際フィールドワーク
開催場所	タイ（コンケン、アユタヤ、バンコク）
開催期間	2023 年 8 月 20 日（日）～8 月 30 日（水）

2023 年 8 月に外国語学部の授業「国際フィールドワーク II（非英語圏）」に関連して、海外研修プログラム「多言語を用いた非英語圏での国際フィールドワーク」を実施した。参加者は外国語学部 3 年および 4 年の 16 名である。前期に 9 コマの事前研修を行い、タイの文化・社会について学ぶとともに、現地で行う日本とタイの文化比較に関する発表の準備を行った。今回の現地研修を経て、後期に 6 コマの事後研修（9/16 および 10/7）を実施し、就職活動を見据えて経験を言語化するとともに、写真報告書を作成する予定である。

現地研修では、最初の 8 日間（8 月 20～27 日）は、協定校コンケン大学人文社会学部の協力のもと研修を行った。21～25 日の午前のタイ語学習と午後のコンケン大学学生とのグループワークに加え、日本料理実演や書道教室といった新たなアクティビティも行った。25 日には現地学生 60 人程度が参加するなかで、名城大生は 5 グループに分かれてプレゼンテーションを実施しタイと日本それぞれの文化の背景にある価値観について発表を行った。26～27 日はムアン郡シーラー村でホームステイを行い、花輪作りや旗作りなどの工芸体験に加え、仏僧への托鉢、守護霊祭祀などにも参加して、東北タイ村落の日常生活を体験的に学習した。27 日にバンコク経由でアユタヤに移動し、28 日は世界文化遺産のアユタヤ歴史公園を見学し、14 世紀以降のタイの王朝と仏教との繋がりについて学習した。29 日はいくつかのグループに分かれ、夕方までバンコク近郊を見学したのち、深夜便にて 30 日早朝にセントレア空港に帰着した。

昨年度は新型コロナからの回復途上であったが、今回はマスクの着用もなく一連の研修を進めることができた。コンケン大学での同研修は 4 回目になり、運営にも問題はなく、書道教室や日本料理の実演など、新たなアクティビティも加え、現地学生にとっても意義のある海外交流プログラムとして実施できた。



